



■【美化活動へようこそ!】



平素は美化活動にご協力いただき誠にありがとうございます。今回は秋深まる中、修学院離宮の清掃奉仕とあって、定員 40 名を超える申込みをいただきました。庭園系の今尾様のユーモラスなアドバイスを受けながら、落ち葉掃きで心地よい汗をかき充実した一日でした。また庭園の樹々や苔、珍しいキノコなどの詳しい説明もあり、大変勉強になりました。

午後からは下離宮（寿月観）～松並木～中離宮（客殿、楽只軒）～上離宮（隣雲亭、窮邃亭）などを巡り、参観コースにない所も見学でき大変感動いたしま

した。

さて、美化活動部会は毎月 1 回会議を開き、前回の清掃活動の反省や今後の予定などを話し合っています。新しく開拓する社寺や再度ご依頼のあった社寺、皆様のご都合を考慮しながら参加くださった方々に喜んでいただける美化活動を企画しております。

ただいま美化活動の仲間を募集中です。特に女性の方、大歓迎です。ちなみに年 2 回（夏、冬）の楽しい懇親会もあります。

（会員 市村 ふみ子）



■【東京支部の第 1 回オリエンテーション】



10 月 8 日東京六本木の「京都アンテナスタジオ 京のお稚児さん」にて東京支部の第 1 回オリエンテーションを開催し 7 名が参加しました。はじめに西野理事より東京支部としての活躍に期待したいとのお話がありました。そして東京支部は住所から自動的にメンバーとなること、当初と比較し約半数のメンバーが入れ替わっていることなどが確認されました。

これまで 2 回懇親会が開かれましたが、新しいメンバーからは東京支部の存在を初めて知ったという声もありました。京都に住んでいない私たちが、東京支部として具体的に出来ることを話し合いました。都草会員となったことで大船鉾や美化活動など深く京都に関われることは大きなメリットであり、喜びであることは皆の共通の気持ちでした。

今回の意見交換から見てきたことは、各会員が京都に行って得た知識、情報、経験を共有する機会として、テーマを決めた勉強会、研究発表会などが出来たら良いのではないかとということでした。今後は、まずはメンバー同士の親睦を図り、同好会的なものから活動を開始し、発展させていくことになりました。

会場を提供していただいた「京都アンテナスタジオ 京のお稚児さん」代表の坪山 多久男（つばやまたくお）様に、厚く御礼申し上げます。（会員 百瀬 明美）

■【 阪急交通社「たびコト塾」“京都を極める” 】

都草は「おでかけ講座」の一環として、大阪梅田の阪急交通社の「たびコト塾」で今年7月より月2回講座を担当しております。毎回好評を得ており、さらに東京でも新講座がスタートしました。これからの会員の皆様の活動が楽しみです。

10月の「たびコト塾」で行なわれた安田 富枝会員の講座をご紹介します。（理事 芦田 喜雄）

・「平安中期に輝いた女性たち」

今から1千年余り前の平安中期は、女性たちがとても活躍した時代だった。その中の紀内侍、小式部内侍、伊勢大輔の3人と清少納言、紫式部を取り上げる。

1) 紀内侍



天皇の命を受けた臣下が、西の京のとある家から梅をもらい受け御所に持ち帰る。天皇がその梅をご覧になっていると、枝に何やら紙が結びつけてあり、そこには歌が一首したためてあった。

“勅なれば いともかしこし 鶯の 宿はと問はば いかが答えむ”

天皇はこの歌に感銘をうけられ、詠んだ者の素性を調べさせたところ、紀貫之の娘・紀内侍であることが分かり、天皇はその梅をお返しになった。その時からこの梅を、「鶯宿梅」と呼ぶようになったという。

2) 小式部内侍

小式部は母親の和泉式部から、その美貌と歌の才能を受け継いだ。宮中で歌合せが行われることになり、小式部内侍も歌人の一人に選ばれていた。ある日、小式部のいる局へ一人の若い公達がやって来て、「歌合せの歌はもう出来たのか、母親から返事の手紙はもう来たか」などとからかった。その時、小式部がとっさの機知で詠んだ歌が、

“大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみもみず 天橋立”

というものだった。この若い公達は、返す言葉もなくほうほうの体で逃げ去った。この公達、名前を藤原定頼といい、藤原公任の息子である。後に小式部は、定頼とつき合っている。

3) 伊勢大輔

一条天皇の中宮・彰子に仕えた女房で、代々歌人の家に生まれた。恒例となっていた興福寺から桜が届き、歌を詠む大役を命じられる。家名を背負い中宮や貴族たちの前で詠んだ歌が、この歌である。

“いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほいぬるかな”

無事に大役を果たした伊勢大輔は、幸福な結婚をして、晩年は白河天皇の養育係を務めたという。

以上の3人の女性は、「三才女」として明治の終わりに尋常小学校唱歌に登場している。

4) 清少納言

一条天皇の中宮・定子に献身的に仕え、定子讃歌ともいべき『枕草子』を書きあげる。漢文の素養があった少納言は、男性とも対等に話ができ、なかでも「平安の三蹟」の一人・藤原行成とは特に仲が良く、そのやりとりの中で生まれた歌はつとに有名である。

“夜をこめて 鳥の空音を はかるとも よに逢坂の 関はゆるさじ”

宮中退出後は東山月輪に住み、友人の多い晩年だったと伝わる。

5) 紫式部

一条天皇の中宮・彰子に仕えた女房。周りの妬みやそしりから身を守るため、教養をひた隠しにして宮仕えをするが後に彰子の父・藤原道長や殿上人にも重んじられた。著書に『源氏物語』『紫式部日記』などがある。清少納言の悪口を書いているが、おそらく顔も合わせたことはなかったであろうといわれている。墓所は北大路堀川下る、小野篁の墓と並んである。

千年以上たった今も、『枕草子』『源氏物語』の二つを超える作品は出ていないといわれている。

（会員 安田 富枝）